
IS-平和に生きたい男

kanashi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 平和に生きたい男

【Nコード】

N8485S

【作者名】

kanashi

【あらすじ】

これは、ありえたかもしれないISの別の可能性
その世界で生きてきた男の新たな一生

IS・H・OO(前書き)

プロローグ

IS・H・OO

「

「おい、起きろ」

怒声や罵倒、銃弾やビームなどが飛び交う中、俺を呼ぶ声に無理やりに意識が覚醒される

「ああ すまない、少し良いのをくらったみたいだな」

「何をしている、こんなところで寝ていると死んでしまうぞ話している暇があるなら現状確認をしろ」

そつだ、俺は今戦場にいる

IS兵器を用いた殺し合い、壊しあいの場所に

IS インフィニットストラトス 正式名称、Infinite Stratos
数年前に制作されたそれは、今までの軍事兵器による争いを一変させた

ISの核となるコアと体を覆う装甲、エネルギーを用いてのシールド形成、

武器の量子化による保存、PICによる浮遊・加減速等、
今までの兵器を軽く凌駕する人が持つにはすぎた玩具

ISも最初からこの様な兵器ではなかったらしい
体の不自由な人のために作られたそれは、当初その不自由な部分を
補い、

動かしやすいようにサポートをする物だったらしい
が、いくら人の為と便利なものを作り上げようが多くの人の目に留
まる便利なものは、

それを利用できると考えるやつらにも目を付けられてしまう
結果、不自由な人をサポートするための機械は今では人を殺すため
の機械になり果てた

最初は、歩兵に装備させ速さとある程度の装甲を持つ歩兵へ、
次は、エネルギーを用いてのシールドの形成、

今までの歩兵では扱えなかったような武器の使用、

武器を量子化したの持ち運び、

PICを使用して空を飛ぶ

そんな素晴らしい兵器を各国が争い、開発に没頭した
もっと早く、もっと強力に、もっと安価に、もっともっと と

そして起こった戦争という名の醜い争い
そうなるのは当然だったのかもしれない、強力な玩具が手に入れば
試したくなる

試した上で他の奴らよりもより高い位置に行くことが出来る

人を道具の一部として考え、人を食いつぶし醜い本能を見せつけ合
うくだらない争い

それが起こるのは当然で時間の問題だったのだ

そして俺はここにいる

兵器の一部となり果てた今の俺
それでも、そんな状態に、意識を失った俺に声をかけてくれる奴が
いたのかと

「はっ」

そんなくだらないことを考えて少し笑えてしまった
今はそんなくだらないことを考えている場合ではない、

一秒でも生き残ることを考えなければ人生が終了してしまつよう
な場所にいるのだから

兵器が一つ壊れるごとに自分という兵器が壊れてしまつような場
所なのだから

だから、今は俺ではなく兵器として思考する

前方から高速でこちらに突撃をかけてくる兵器に狙いをつけて

どうすれば敵兵器を破壊できるのかと

引き金を引きながら

あれから、どれだけの時間が経ったのかは分からないが危険な状態
である事には変わらない

エネルギーの枯渇、使用した兵器の弾薬切れ、装甲も剥げ落ち露出
した肌、友軍機の減少

危険でありながらも帰島することの許されない状況

「…どうするべきか」

今現在、自機のみを残し他友軍機はおらず、増援も見込めない

「そんな状態に無人機の登場か…」

現在、俺を囲んでいる兵器の群れは量産の目処がようやく立ちそうになった新兵器

人を使わず、人に使われ、ただ命じられるままに、全てを壊す

あれは俺たちのように疲れる事を知らない、エネルギーが枯渇するまで動き続ける

まるで、上が求め続けた理想の玩具

「…」

どうでも良い、そんな物を作ったのであろうと、そんな物が今ここに存在しようよ、

俺がする事はただ一つ

「どうやって突破するか…」

生き残る事のみ

瞬間、数百を超える光の雨に俺の視界と思考はのまれていった

IS・H・OO（後書き）

書いてる人間は、原作見てない、アニメもみてない。

投稿小説などを見てなんとなく気に入った部分があり、書いてみたいと思つた事を書いているだけ。

これ以外に一話出したばかりだから、ほとんど初心者で在ります。読んでくれるとありがたいです。

ゴソツ、と何かがぶつかつた様な衝撃が返ってくる

「ツツ」

その時何が起こつたのか分からなかった、

急に頭を走つた衝撃に理解が出来ない状況に立たされる

何が

ここはどこだ

あの戦場にある音、臭いが無い

倒れている状況であると思われる俺の体に伝わる感触があつた戦場の物ではなく、

やわらかな自然の臭いのする木製の何かだと返ってくる

周りに気を付けながら立ち上がり、注意深く周りを観察する

いったい何が起きている

そこは今までいたはずの戦場ではなかつた

戦場に広がる死体の山、血で覆われた大地、壊れたISの放電

それらの物が何一つ無く、まるで平和で安全であるかのように静かな何処かの家

ありえない

そつだ、こんな状態はありえない存在するはずがないのだ

戦争を行う餓鬼どもは全てを壊し、奪いつくす

こんな、まるで平和で安全であった頃のような場所が存在するはずはないのだ

「ッ
」

言葉が思ったより上手く出てこない
どうなっているのか考えると、体の感覚がおかしい事に気づいた

肉体の破損状況が無く視界の低下、
何処にいるのか分からない状態で考えるまであまり湧きあがらな
かった警戒心

その事に気付いた時、自分の体を観察した

ありえない

その考えしか思い浮かばなかった
体の状態は直ぐに把握することに成功した
肉体の退行でも起きたのか縮んでいる体
われる肉体
が、
おそらく幼児期と思

俺が内心、混乱しかけている所に何者かが近づいてきた

「大丈夫か、一夏」

少し心配そうに俺に声をかけてくる奴、声からして女だが彼女はな

んと言った

一夏だと、俺に向けて言ったのか

俺はその女を見上げ情報を聞き出そうとしたが

その女を見た瞬間情報を聞き出そうとは思えなかった

「大丈夫だよ、姉さん」

瞬間、俺の思考は完全に混乱した

何だ今のは、俺は今無意識に何と言った

姉だと、そう言ったのか

俺にそんなものは存在しない、だが、俺はこの女を姉であると考
えている

「そうか、だがあれくらい強くぶつけたのだから一応ぶつけた所を
見せてみる」

そう言いながら、俺の頭を固定し観察している女、

動揺を隠しながら状況を把握しようとするやうと努めていると

「ふむ、この程度ならなんともないな大丈夫だろう」

と、女は俺の頭の観察を終了し手を離す

「私はこれから少し出てくるが、気を付けて留守番をしているよ」

「あ、ああ……」

「よし、ではいつてきます」

「い、いつてらっしゃい……」

俺が混乱しながらも何とか言葉を返すと女は満足そうに、この何処かの家と思われる場所から出て行った

「何なのだこの状況は……」

1人になった事で先ほどとは違い少しは考える余裕が出てきたところで、俺はもう一度今の状況を再確認するために思考に入った

「俺は、確かあの場所で」

そう、俺が憶えているのは確かにあの戦場にいた事

あの戦場で最後に見た無人兵器により体を貫かれそうになった事

「それだけのはずだ」

だが、そこまで考えて先ほどの女を姉といった事、姉と思っている事に疑問が湧き

更に深く思考に潜っていく

と、

「何だこの記憶は」

俺の名前は織斑おりむら 一夏いちか、先ほどの人は織斑おりむら 千冬ちふゆ
俺の唯一無二の姉である
今まで姉と過ごしてきた日常、姉と共に笑いながら過ごしてきた日
常、

今の世界にあるはずのない平和な日常

「何なんだこの記憶は…」

俺は織斑 一夏
違う、俺は のはずだ
だが、俺は確かに織斑 一夏でもあるはずなんだ

他に何か情報は無いか調べてみると、テレビと思われるものが目に
入った

「これなら、何らかの情報が手に入るはずだ」

本日のニュースは

「なんだこれは」

今日の天気は

えー、今日は にやってまいりました

私は、 に向けて精一杯努力していききたいと思います

「何なんだ一体…、これは、私がおかしくなったという事なのか」

えー、次は

「ハハッ
」

笑える

俺の記憶に確かに有るはずの世界との違い
その俺と今の俺との違い

「認めるしかないのか」

何がどうなってこの状態になったのかは知らんがこの体の持ち主か
ら精神を乗っ取ったのか

あるいは、魂とやらが存在して前世の記憶とやらでも思い出したか

「どうでもいい」

そう、そんな事はどうでもいい

今、俺は確かにこの世界に存在する

この記憶と、この思いが偽物であるとは思えない

この気持ちを知った今、あの頃のように生きなくても良い
そう
思えた

「この世界で生きていい」

この記憶が俺の物であるのなら、どちらの記憶も忘れずに
今度こそ、俺は俺として生きていい」

この状態にした誰かがいるのなら俺は感謝しよう
新たな兵器としてではなく

俺として生きられる世界を与えてくれたのだから

「さあ、これから何をしようか」

考えがまとまったら気持ちがつっきりした

顔にも自然と笑みが浮かんでくる

俺は、笑みを浮かべたままこれからの事を考える思考に耽っていった

「じゃあ行ってくるよ、姉さん」

「ああ、楽しんでくると良い」

時間の流れは速いもので、俺がこの様な状態になつてすでに数年経っている。

この世界ではISは存在せず、それを使って起きていたくだらない戦争も無かった。最初の頃は戸惑う事も多かったが今ではこの状況に慣れ、今までに考えた事すらなかったこの幸せをひたすらに満喫していた。

俺の親はどうやらないみたいだが、姉さんが俺を支えてくれている。姉さんにはどれだけ感謝してもし足りないくらいだ。普通に学校へ行き、家族や友達とも笑いあえる。姉がいなかったらそんな事も出来なかったかもしれない。

俺に有つたのはあの時の

そんな考えをし始めた頭を振り、嫌な思考を振り払う。んー、と伸びをした後空を見上げ、これからの事を考え始める。

「さて、今日はどこへ行こうか」

俺は、今日はどのような事があるのかを楽しみに街へと繰り出した。

「おや？ 箒じゃないか？」

俺の前方で竹刀袋を持ち立派なポニーテールを左右に揺らしながら歩いているのは、篠ノ之^{ノノノ} 箒^{ハチ}以前いじめにあっていた所を助け、話したりしている間にそれなりに仲良くなった人物だ。

「おーい、箒ー」

俺の呼び声に気付いたのか箒はキョロキョロと辺りを探している。

「どうしたんだ？」

「やはり一夏か、いや、これから道場の方へ向かうのでな。それよりもそっちこそどうしたんだ？ 何か用事でも有るのか？」

「いや、これと違って無いよ」

「そうか、ならこれから一緒に道場の方へ行かないか？ 久しぶりに剣道をやって共に汗を流そうじゃないか」

「いや、久しぶりって…。3日前くらいには行ったじゃないか」

俺は三日前にも、この箒という名の少女に徹底的にしごかれた。休憩をほとんど取らずに素振りやら試合やらをさせ続けるのはどうよ？

「3日も来なければ腕は落ちるのだ！ 大体お前はいつもいつも遊んでばかりで…」

「分かった、分かったよ」

箒はいつも説教を始めると長くなるのだ。俺は降参とばかりに両手を挙げた。

「ムッ、分かれば良いのだ」

「だけど俺、道具は何も持ってないぞ？」

「ふむ…。そうだな…」

箒はあごに手を当てると考え込んだ。俺は箒が思考に耽っている

間にそろりとはばれないように逃げ出そうとする。が、

「何をしている？」

ギクツ！ とばかりに肩を震わせ、そつと後ろを振り返ると箒がとても良い笑顔でこちらを見ていた。

「え〜つと、これは、その…」

まずい、とつさの言い分けが思いつかない。

「また、逃げ出すつもりだったのかお前は!!」

箒は俺の首根っこをつかみずると、俺を引きずるように歩いていく。

「いや、もう逃げないから！ 離して！」

「黙れ、今度という今度は許さん!! そのたるんだ根性一から叩きなおしてくれるわ！」

「だから、俺、今道具、何も持ってな…」

「道具なら道場に置いてある物を使えばいい！」

「ちょっと、離して、息が、苦しい。それに、置いてあるのは、俺には、合わないだろ」

「うるさい！ そんなもの根性でどうにかしろ！！ この手を離したらまた逃げるかもしれないから道場までこのままだ！ それに、道具が合わないというのなら私の物を貸してやる」

「ええ！？ それはそれでどうかと…」

「箒よ、お前は自分の使っている道具を男に使わせても平気だというのか…。今からこんな状態で大丈夫なのかと、俺はお前の将来が心配になってくるよ…」。

「俺が内心、箒の将来と息が苦しくなって目がかすんできた事に思いをさせていると、道場に着いたらしく、箒も手を離してくれて息苦しさからも解放された。」

「ごほっ、ごほっ…。おい箒、お前は人が息をせんと死ぬという事を知らんのか！」

「ふんっ、手を離れたら逃げるかもしれないお前が悪い。ほら、道具は貸してやるからさっさと準備して来い」

「まったく…、こんな事ばかり続けるお前の将来が心配になるよ。いつか、気になる人でも出来た時にこんな調子でお前はとうすのかと…」

「安心しろ、こんな事をするのはお前に対してだけだ」

と、言い残して箒は着替えに向かった。何に対して安心しろと言っているのが分からんが、なんで俺に対してだけだよ！ と、是非とも突っ込みを入れてやりたい。

「まあ良いか。今日はとくに用事も無かったし」

俺も剣道の準備を行うために渡された道具を持って着替えに向かった。

「っ、つかれた」

あれから数時間、みっちり剣道の練習を付き合わされた俺は疲労困憊の為両手足を広げて道場に寝転がっていた。

「ふんっ、鍛錬が足りないからそうなるんだ。これに懲りたら毎日欠かさず鍛錬をすることだな」

それは確かに、あのとときと比べると子供になっているために体力や筋力は比べ物にならないほどに落ち込んだが、それでも毎日あちこちを動き回ったりしているおかげで子供にしてはそれなりに体力は有る方なんだぞ？　なのになぜ、俺が疲労困憊の状態なのにお前はその程度しか疲れが見えんのだ？

「そ、それで、だな…。一夏、私がお前を鍛えてやるからこれから毎日…」

「それは断固拒否する」

箒が俺を剣道という名を借りた地獄に叩き落とそうとする事にはきっぱりと拒否の言葉を伝える。

てか、今さらこんなきつい事を毎日なんて続けられんわ！！

俺が箒の言葉に重なるように拒否の言葉を告げると、箒は顔を真っ赤にしていかにも怒っていますというような顔に変化した。

やばい。

「くっ、ええい、勝手にしろ！　この貧弱者めが！！」

ひゅんひゅんと、竹刀が俺めがけて飛んでくる。もちろんのこと

疲労困憊で動く事を拒絶していた俺がそれをよける事等出来るはずもなく…、

パシンツ、と良い音が道場に響いた。

「ッー、ッー」

俺が痛みでゴロゴロ転がっていると、

「勝手にしろ！ 一夏の馬鹿！！」

と、俺が悶えることになった元凶は捨て台詞を残しこの場を去って行った。

ゴロゴロ転がる事数分、痛みも引いてきた事なので帰る支度をするために立ち上がり、着替えへと向かった。

「はあ〜」

俺は帰り道で溜息を吐いていた。なぜ箒があれほどの怒りを見せたのかが分からなかったからだ。ほんの少し前まで普通に話をしていたと思うと急に怒り出した。これまでにも何度が有った事なので、箒には怒り癖があるんじゃないかと考えてしまう。

まあ、そのうち機嫌をなおすだろうと判断を下し家路へと向かう速度を速める。借りた道具を返しに行かないといけないが、それは明日になっても大丈夫だろう。ついでに久しぶりに束さんとも話し合う事にしよう。

束さんとは、箒の姉の篠ノ之^{しほの}束^{むすぶ}の事である。この束さん、頭の中はどうなっているのかと疑問に思うほどの天才である。こちらの世界では見た事もない技術をポンポンと出してくるのだ。ましてや、その技術力の高さは前の世界においても見た事も無いような技術もたまに出てくるほどに高いのである。ほんとどうなっているのか…。

この束さんとは仲良くしている間柄だ。前の技術を持っている俺もたまにどのようなものを作るかで話し合ったりもしている。無論、IS等の兵器を除いた物をだ。最初の頃は歯牙にもかかけられていなかったが離し掛けている間に興味をもたれ、すっかり意気投合したのだ。

「ふむ、今日はさっさと帰って明日に備えるか。」

俺は、明日どのような事を話し合うべきかを考えながら家路を急いだ。

「一夏、今日は束の所に行くんじゃないの？」

「ああ、もう少ししてから出る予定だよ」

「そうか、なら私は先に出るから戸締りはしっかりして行けよ？」

「分かったよ」

今日は姉さんも箒の家に行くことになっていたらしい。束さんと何らかの話があるらしいのだ。最初は姉さんと一緒に行くつもりだったが、少し準備に手間取っているので遅れることになった。

「ふむ、これで準備は良いな」

先日箒から借りた剣道の道具を準備し、忘れ物がない事を確認した後、俺も家を出た。

ピンポンと呼び鈴を鳴らしたが返答がない。おかしいな？と思いつつも一度呼び鈴を鳴らしたが、やはり返答は無かった。

今日来る事は知らせてあつたし、姉さんも先に来ているはずだから誰かいると思つていたのだが、仕方ないから出直すかと考え踵を返した所で返事が返つてきた。

「おや〜？ いつくんだったのか〜。ごめんね〜？ 少しちーちゃんとの話に夢中になつちやつてね〜。鍵は開けとくから入つて私の部屋で休んでて」

「わかりました。でも、姉さんと何の話をしていたんですか？」

「いつくんも興味あるの？ う〜ん、話しても良いけどそれだと後の楽しみが減つちやつしな〜」

東さんは何らかの考えを持っているようだ。姉さんもその話に加わっていると考えていいのかな？ それなら俺も楽しみは後に取つておこつ。

「それなら今度で良いですよ。後の楽しみつて言つてる事は何か有るんですよね？」

「そうだね、それは楽しみにしてもらつても良いと思うよ？」

「じゃあそれまで楽しみにしていますよ。それと、家入らせてもらいます」

おじやまします、と俺は篠ノ之さんの家入らせてもらった。

「やあやあいつくん、まったかね？」

「姉さんは一緒じゃないんですか？」

「酷いよいつくん、久しぶりに会った私よりも先にいつも一緒のちーちゃんの方を気に掛けるなんて」

東さんはよよよ、とわざとらしく泣き崩れるふりをした。

「そんなわざとらしくしなくてもなんとも思いませんよ？」

「やっぱり酷い！？」

「で？ 姉さんはどうしたんですか？ 先に来ていたと思うんですが」

そう聞くと、東さんはよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに勢いよく顔を上げた。

「ちーちゃんには今ちよつとした仕事を頼んであるんだよ」

「仕事ですか？」

「そつだよ」

「一応聞いておきますけど何の仕事ですか？」

「ふっふっふっ、それは秘密なんだな。ま、もう少ししたら分かると思うからもうちよつと待ってね」

「そうですか。それって最初に行つてた事と関係ありますか？」

「関係つていうか、そのものつて言つた方が正しいかな？」

「じゃあ、それまで待たせてもらいますよ。あ、それとこれ昨日簿から借りたものです。」

「ふふふ、ぜひ楽しみにしておきたまえ。いつくんには楽しんでもらえるとと思うよ。ああ、これは簿ちゃんには私から返しておくよ。」

「頼みます」

俺は簿から借りた物を渡すと、暇をつぶすためにパソコンを立ち上げ作業に没頭していった。

あれから、数十分俺と束さんは俺の考えた作品に対してあーだこ

「だと意見を言い合っていたが、ふいに東さんが顔を上げた。

「そろそろ時間だね」

「なんの時間ですか？」

「見ればわかるよ」

そう言うと東さんはテレビを付け、チャンネルを操作して番組を探していく。

「あつたあつた、良いタイミングみたいだね」

「さて、いったい何が始まるのか…」

テレビの画面に映っていたのは多くのミサイルが発射された事、それが外部による何者かの手による事だと説明する人、それと

人が機械を身に纏い空を飛び、武器を持ち目標を破壊する。

この世界に存在しないはずの以前の世界の兵器に酷似した兵器

そんなモノが存在していた。

俺の思考は一瞬でその事で埋め尽くされた。

なぜこんな物があるのか、なぜこんな物がミサイルを破壊しているのか、なぜなぜ、とその事しか考えられなかった。

その時、東さんの声が聞こえてきた。俺の思考は急速に引き戻され、今持っている疑問を全て東さんにぶつけた。

「あれは何ですか！　なんであんな事をしているんですか！　何でそれを貴方が知っていたんですか！　何で」

「ちよつといっくん落ち着きなよ、何があつたのかは知らないけど何でそんなに興奮しているのさ？」

「そんな事はどうでもいいです。あれについて知っている事を全て話してください」

「わかつたよ、あれはね」

俺は東さんから全てを聞いた。

それは以前から作られてあつた事。

それはこれ以前にも世界に知られていた事。

それを作ったのが束さんであった事。

それは以前は世界に理解されていなかった事。

それを俺が以前にも知りえたかもしれない事。

それを世界から隠すのはすでに手遅れである事。

ISという名の兵器と中身という名の歯車が誕生したという事。

全てを聞き終えた俺は愕然となった。

これがこの世界に産み落とされ世界に浸透していく。そんな事がある可能性を微塵も考えなかった事に対して後悔の念しかなかった。

考えてみればありえない話ではなかったのだ。俺の目の前にいる天才はこの世界より何世代も前の情報を持つ俺の技術に拮抗し、時には追い越してもいたではないか。

「ハハッ」

これからどうするべきか。

にちじょうはもどらない。

せかいはあれていく。

ここもあなるのか。

「そうじゃない」

「そうだ俺は今度は守るべきなのだ、世界を敵に回してでも俺の日常を守るために。」

「その為には必要なのだ。兵器が、それを使用する技量が、それらを作り上げる部品が、それらを俺が手に入れるための時間が。」

「篝さん」

「何？ いくくん」

「お願いがあります」

「目の前にはあれを作り上げ実用可能な状態にまで持って行った天才がいる。彼女の力を借りれば多少の時間の短縮が可能だと判断した俺は、彼女の力を借りるために動いた。」

この世界に俺としての兵器をくみ上げるために。

全ては俺の世界の為に。

IS・H・O2 (後書き)

思いついた時に描き続けているから中々進まない。

箒や束の話方ってこんな感じでいいのかな？

IS・H・O3 (前書き)

明けましておめでとございます。

年明けにこんな話を投稿するのもどうかと思いましたが、何故か続きが湧いて出てきた後に完成したのでとりあえず投稿しました。

東さんにISの技術を学び始めて俺は遊ぶ事が少なくなっていました。篝や他の人が来たとしてもやる事があると断る事が増え始めたのだ。それでも、たまには息抜きのために遊ぶ事もあったが、子供というものは簡単に変わっていくもので、共に遊ぶ事が減ると段々と自分たちとは違うと考え、少しずつ離れていくものなのだ。

今では篠ノ一家もこの町から姿を消し、一人で家に籠っている時間が多い。あの白騎士事件と呼ばれるようになったISが初めて世界に注目されるようになった事が起きて数日で、ISおよび篠ノ之 東は世界中で注目の的になった。

東さんにISの技術を学び始めて数年で篠ノ一家はこの町から姿を消した。ISというオーバーテクノロジーの結晶を作り上げた人物は、あらゆる方面から技術提供や監視などを受け、便利な道具を作る道具として狙われ始め、それに嫌気がさしたのか他の理由だったのかは分からないが、篠ノ之 東が家族と共に姿を消す理由としては十分すぎる材料が揃っていた。

数年学んだとは言えこの世界のISの事を完全に理解しているとは言えないものである。この数年で東さんと共に数台のISを組み上げる事に成功している。しかし、この世界のISというものはおかしなもので、何故か男には反応せず女にのみ反応するようになっている。これは俺も含めた実験に携わったものを含めた検証結果である。

また、唯一ISのコアを製造できる東さんが姿を消した事によっ

て世界に残されたISを形作るコアは今までに作成された467機のみとなった。

「夏、

おいー夏」

誰かが俺を呼ぶ声に意識を呼び起こされる。
目を開けるとそこには、千冬姉さんが顔をのぞいていた。

「どうかしたのか、姉さん」

この世界においての俺の姉、おりむら織斑 千冬。ちふゆ

日本の代表を務め、第1回IS世界大会総合優勝および格闘部門優勝者。また、現在行われている第2回IS世界大会での最優秀候補。

「いや、着いて早々で悪いのだが1人で会場の方に向かってくれないか。

私は大会の準備等があるから先に行かないとならない」

「了解した」

「時間もあるから少し観光でもしてみるといい。
会場の場所は知っているな？」

「知っている」

「それなら良い。それと、いいかげんその喋り方は直せ」

姉は俺の肯定の言葉を受け取った後、そんな言葉を言い残した後
に振り返ることなく部屋を出て行った。

現在、俺は第2回世界大会が行われる街へ来ている。箒も居なくな
ってからは外へ出ることがなくなっていた俺は、千冬姉さんが
モンド・グロツソに出ることになったので一緒に付いて行く事にな
った。

千冬姉が出て行った後、着替えを行い観光を行うために俺も部屋
を出ようとした。

俺は現在町を見て回っている、後に姉に報告する事の情報を入力
する為にだ。が、現在俺を付け回している奴等がいる、どこの奴ら
かは知らないが俺を狙う理由は何だ？

この時期、この場所、そして俺、該当する事が存在した。

「千冬姉に関する事が…」

おそらく、今日行われる世界大会において姉を引きずり下ろすための何らかの行動を起こすために俺の捕獲を行おうとしているのだろう。

そこまで考えるとこちらを監視していた奴等が動き出した。

俺はそれを振り切るために走り出した。

急に走り出した俺を見て奴等も慌てたらしく、少し遅れて奴らも走り出した。

「捕まるわけにはいかない」

警察機関に頼るわけにはいかないだろう。

奴らが何らかの形で手を付けてある可能性がある。

なら、各国の代表等が集まる世界大会の会場へ行けば奴等も手は出せなくなるだろう。

あれから数分間逃げ続け、会場が見えた所で急にISが上空から降ってきた。

「…」

状況判断が甘かったか、奴等が何処の組織かは知らないがISを用いてくるとは…

いや、こんな短時間でこんな物を出して来るとは

違う、気づかれたと判断された時にすでに状況が動いていたのか

その後、これだけの時間をかければこの状況になるのは当然

多少、あの時と違う生活をしていたからといって判断力を鈍らせるとは思わなかった。

少しの判断ミスで全てが終わる事も有るというのに。

39

「見つけたぞ糞餓鬼が、いちいち私の手を煩わせんじゃねえよ」

バイザーによって顔を隠し背部から八本の装甲脚を生やした機械の鎧を身に纏った女が

殺気を撒き散らしながらこちらに近づいてきた。

バンッ

何かを強く叩くような音によって俺は目が覚めた。

「こんな糞餓鬼一人相手に、わざわざ私の手をわずらわせるんじゃないよ」

俺が目を覚ますと大多数相手に言葉を叩きつける奴がいた。

「糞ッ、なんで私がこんなことしないといけないんだよ、ああっ、他の奴はいなかったのかよ。聞いてんのかよクズどもが」

「はい。ただいま、オータム様の代わりとなる人物が向かっていきます」

「最初からそいつを呼んでおけばいいだろうがッ」

「はい。我々もまさかこのような子供に巻かれそうになるとは思いませんでしたので…」

「だから何で私が貴様らみたいなクズ共の尻拭いをしないといけないんだよ。殺すぞ」

先ほどまで叫んでいた人物が目の前の人物を殴りつけた。会話の内容から推察すると、ISを使って俺を捕獲した奴は目の前で叫んでいる女だと思われる。

かなり頭に血が上っているのか、まだ殴り足りないらしくさらに別の人物に手を伸ばした所で、オータムと呼ばれる人物に近づいていく奴がいた。

「オータム様、後任の人物が到着したらしいです」

「ああッ、遅いんだよ糞共が。ならもう後はそいつに任せて私は行くからな」

そう叫び付けた後、オータムと呼ばれた奴はここを出て行った。

「クソ、なんで我々がこんなことを…」

「この糞餓鬼のせいだ」

「殺してやりたいくらいだぜ」

そんな言葉がやり取りされると、俺に近づいてくる奴がいた。

「殺さなければ何をやってもいいんだろっが」

「やめないか」

俺に近づいてきた奴がその言葉を聞くと動きが止まった。

「貴様らはこの任務を何だと考えているのだ。これに傷を付ける
と後々厄介なことになるかもしれんのだぞ」

「す…、すみません」

「ふんっ、貴様らはこの餌を時間まで逃がさないだけで良いのだ。
貴様らのような役に立たない男共は、この程度の任務しかまともに
出来ないだろうが…なんだ」

「い、いえっ。何でもありません」

「ふんっ、貴様らがこんなガキ相手に逃げられるから、わざわざ
私たちが手をかしてやっているのだ。くだらん男共に手を貸してや
っているだけでもありがたいと思え」

「はい。すみません」

「そろそろ、奴にこの情報が伝わる頃だ。撤収準備をしておけ」

「分かりました」

その言葉と同時に、一斉に騒がしくなった。

このまま待ち続ければ、おそらく五体満足で戻れるだろう。が、
ちよつと良かった。拐われたというこの状況を十分に利用させても
らおう。ちよつと必要だと考えていたISを持っている奴がいるら

しいのでそれも貰っていいよう。

千冬姉には迷惑をかけるかもしれないが…。思い残すのはそれだけだな。もう少しだけこの生活に浸っていたかったが…。このタイミングが一番いいのかもしれないな。

チャラッ

それを考えると同時に、腕に巻きつけてあった物を動かした。

幾人かは俺が何かをしようとしているのに気がついたらしい。だが

「なんだ」

遅い

「ここか…」

ドイツの諜報部から一夏が何者かに拐われたという情報を聞き、大会を棄権した後に急いで一夏がとらわれていると言われる場所に

飛んできた。

「一夏」

情報部から聞いた倉庫につくと同時に、何があるかも考えずにドアを叩き壊し中へと入っていった。

「いち」

と、同時に普通なら無い筈の匂いと惨劇が広がっていた。

「あ、あ、一夏、どこにいる、一夏アー」

目の前に広がるのは赤で染められた地面と、人としての原型を留めていない物。腕や足が何か強い力でねじり切られたような物体や、潰れている肉片、無理やり突き破られたような穴を開けている物等もあり。壁なども所々焦げついて血や肉の焼き付く嫌な臭いを充満させていた。

嫌な予感かしてISの能力をフルに使用して一夏の姿を探す。

「一夏アー」

嫌な予感とは違い、一夏の形をした物体が見つかる事は無かった。

だが、代わりに一夏という人物も見つかる事が無かった。

「どうにも、一夏アー」

IS・H・03（後書き）

以前考えていた話とは変わっていきました。

未だに就活を行い、時間があまりとれませんが小説を途中で止めるつもりは有りません。亀の様な歩みになると思いますが、これからもよろしく願います。

では、今年も良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8485s/>

IS-平和に生きたい男

2012年1月2日01時45分発行